

「三四郎」 夏目 漱石 著 新潮社 1948 年発行 (新潮文庫)

夏目漱石の「こころ」「吾輩は猫である」「坊ちゃん」は、読んだことがない人でも一度は題名を聞いたことがあるくらい有名だ。私が高校生の時の国語の教科書には「こころ」が載っていた。高校生の私は教科書に載っていた「こころ」が面白く、教科書に載っていない前半部分が気になり、学校帰りに書店に行って単行本を購入し、読みふけた。私は 2019 年 9 月に旭川高専に着任してからまだ 1 年と少しと日が浅いため、残念ながら旭川高専で使用している国語の教科書を見たことがないが、きっと教科書には「こころ」が載っており、毎年多くの学生の心を掴んでいることだろう。

夏目漱石は裕福な地主の子供として生まれるが、望まれない子だったため、2 度も養子に出されるなど少々複雑な人生を送っている。漱石は今の東京大学を卒業後、高等師範学校、旧制松山中学、熊本の第五高等学校を英語教師として転々とした後、1900 年ロンドンに留学する。日本に帰国後、「怪談」の作者で知られる小泉八雲の後任として現在の東京大学の英語教師になるが、小泉八雲が人気講師だったのに対し、夏目漱石は授業中に癩癩を起こすなど学生には不評だったらしい。漱石は昔から精神衰弱を患っており、その治療の一環として創作活動をはじめ、のちに人気作家となるのだから、人生はどうなるか分からないものだ。

さて「三四郎」だが、東京大学に進学するため熊本の第五高等学校から上京した「三四郎」の青春物語といったところだろうか。三四郎が熊本の第五高等学校出身というのは、漱石自身が熊本の第五高等学校で英語教師をしていたことから、そういう設定にしたのだろう。物語自体は特に盛り上がりを見せるわけでもなく、日常が淡々と進んでいく。その中で三四郎は様々な人と交流し、最終的に失恋をする。物語の舞台は現在の東京大学駒場キャンパス近辺だが、「三四郎」を読んだ後にこの近辺を散策することをお勧めする。きっと皆さんの目には、明治時代のこの付近の情景や「三四郎」が見た世界が浮かぶことだろう。そのくらい夏目漱石が書いた文章は、この近辺の情景を見事に表現している。話はそれるが、川端康成の「伊豆の踊り子」の冒頭を読みながら、天城峠に行くこともお勧めする。皆さんは、きっと川端康成の文章力に感銘を受けるに違いない。

三四郎のヒロイン里見美禰子（みねこ）は、主人公以上に印象的な登場人物である。三四郎の舞台は明治時代であり、当時の女学校を出ても未婚の女性には、帰属すべき社会がないという大変厳しい時代だったようだ（橋川ら 共立女子大学国際学部紀要, 2012 年）。そのような時代の中、美禰子は自立しようと躓<sup>もが</sup>いているように感じた。美禰子が頻繁に口にする「ストレイシープ（迷える羊）」は、三四郎に向けられた言葉であると同時に美禰子自身に向けられた言葉だったのかもしれない。また、美禰子が結婚前につぶやいた「われは我が咎（とが）を知る。我が罪は常に我が前にあり」は旧約聖書の一節だそうだ。この美禰子のつぶやきは、とても印象的な場面だが、どうしてこのようなセリフを言ったのかを考えさせられる場面でもあり、奥が深い。まだまだ書きたいことはたくさんあるが、内容が気になる方は是非一度は読んでみてほしい。名著として知られている本なので、今後の人生を豊かにしてくれる 1 冊になると思う。